

漢字は子どもの推理、分析能力を自然に引き出す

漢字教育の効果は、幼児の語彙を豊かにするだけにとどまりません。“見る言葉”としての漢字には、特別に意識をしなくても、覚えて、くり返し読んでいるうちに自然に幼児の知能の発達を促す、いふなれば“脳の栄養素”がぎっしりと詰まっているのです。

たとえば、「鳩」「鶴」「蟻」「蝶」という漢字を知っている子どもは、誰かに教わらなくとも“鳥”や“虫”という共通部分を発見し、「鳩」と「鶴」、「蟻」と「蝶」が同じ仲間であることがわかるようになります。そして、習ったことのない「鶯^{うぐいす}」や「蝉^{せみ}」という字を見ても、“鶯”は鳥の仲間だなとか「蝉は虫の名前かな」というように、分析したり推理したりする能力がひとりでの芽生えてくるのです。

言うまでもありませんが、「はと」「つる」「あり」「ちょう」と、かな表記で教えていたら、このような能力はまず育ちません。

また、「目」という漢字を覚えたばかりの幼児に、「見る」という字を見せ、「じゃあ、これはなんて読むか、当ててごらん？」と言いますと、“目”に関係のある言葉ということを手がかりに、かなりの確率で正解します。これも、漢字だからできる類推であって、ひらがなはもちろん、英語でも目はeye、見るはseeで、両者の綴りにはまったく関連性がないため、eyeという言葉を知っていてもseeの意味を推測することはできないのです。

これは石井式漢字教育を実践する幼稚園で実際にあった話ですが、ある日、先生が黒板に「悪魔」という漢字を書いて、「誰かこの字

が読めるかな？」と尋ねたところ、答えられる子どもはいませんでした。そこで、先生が「これはね……」と言いかけると、子どもたちは慌ててそれを制し、「待って、教えないで。自分たちで考えるから」と言って、相談をはじめたというのです。

子どもたちは「悪」という字はすでに習って知っていました。また、はじめて見る「魔」という字の中に、すでに絵本に出てきていた「鬼」という字があることを誰かが発見します。そうしたことを手がかりに、どんどんイメージを膨らませていき、

「“悪魔”って、きっとすごく悪いヤツだね。鬼みたいに怖い、悪いヤツって何だろう。えーと、アク、アク、……先生、これ、ひょっとして、アクマじゃない？」

と、ついには自分たちだけで正解を導き出してしまったのです。

このように漢字は、見ているうちに頭の中で自然に推理や分析が働きはじめ、子どもたちの自ら考える力を引き出す、不忠議な力を秘めているのです。